

入選

あたりまえが幸せ

山形県 山形大学附属小学校

四年 市川 紗音

「休校になるよ。」

ある休日の母のひとつことに、私は最初「なんで？でもたいしたことないよね」と、深刻には受けとめませんでした。それが、こんなに長い長いトンネルの入口になるとは、思っていなかったからです。ただ、三学期のおわりに転校することになっていたお友達と、もう会えることなくお別れすることになるんじゃないかと心配になりました。

休校期間の最初のころは、ちょっと長い連休のようで、母と弟と近くの河原に行ったり、読書や自主学習をしてすごしていましたが、なんだか心がにぶっていく感じがしてきました。それがなんなのかわからなくて、不安な気持ちがつみかさなって、どんどん苦しくなって、友達に会いたくなりました。先生方の顔を見たくくなりました。学校に行きたくて行きたくて、苦しいのだとわかりました。

新学年になるころ、登校日があるとと言われて、とてもとてもうれしくなりましたが、コロナ拡大のニュースが大々的にほうじられると、やっぱり中止になりました。

学校に行けると聞いて、とてもうれしくなるぶん、やっぱり行けないと言われたときは心がすーっと冷たくなるのを感じて、また心がにぶくなりました。うれしいと感じなければ、悲しいと思うこともないんじゃないかな、とも考えたけれども、そうこうしているうちに、どうしたらいいのかわからなくなって、なみだが出てきました。

でもやっぱり、どうしてなのかわからず考えて考えていると、私はねむれなくなり、ごはんが食べられなくなり、じんましんが出るようにもなりました。

「もう二度と学校に行けないのかもしれない。友達に会えないんじゃないの？ コロナってなんなの？ 私がおかしいの？」

母にもどうしてほしいのかわからず、泣きわめいてあたってたりしました。でも母は、いつもと同じでした。コロナだからといって、何もかわりませんでした。私の話を聞いて、「そのままでもいいんだよ」と言いました。わからないことは無理にわかることもないし、笑えないときは笑う必要もない。「やれることをやればよい」と言いました。何度も何度もそう言われたので、そのうちに自分でもそうだなと思い始めました。

やっとやっと、学校がさいかいされることになって、新しいクラスに入ったとき、ひさしぶりに見るお友達の顔がかがやいて見えました。みんなと会えた私の顔も、きっとかがやいていたと思います。それから一年、毎日毎日、また学校に行けない日が来るんじゃないかとずーっと考えています。

教室で、校庭で、友達や先生と話したり、遊んだり、勉強したり、給食を食べたりしているときに「明日もこのままでありますように」と思います。

まわりの人がいて、自分がある。支えてもらって、毎日のあたりまえがとんでもなく幸せな私の居場所なのだとコロナが教えてくれたのだと思います。